

「女性の領域」を読む女たち

セアラ・ヘイル『女性講演家』のジェンダー・ペダゴジー

増田久美子

はじめに

一八三九年、セアラ・ヘイルの小説『女性講演家、あるいは女性の領域』^①が女性による講演行為の批判書として匿名出版されたとき、マサチューセッツ州ブルックラインの名士ジョーン・ピアス牧師は、この小説を娘たちに朗読して聴かせた。ピアス家の家父長の行為には、一八三〇年代に「男女からなる聴衆」の前で講演活動をしていた女性たちに対する強い非難が含まれていたに違いなく、娘たちに小説の副題でもある「女性の領域」とは何かを教え諭そうとした意図は明確だろう^②。伝統

的な「ピューリタン気質の北部人」^③と称されたピアス牧師にとって、娘たちがこの小説の主人公のように公的な場に登壇して女性の権利を声高に訴え、結婚後も夫の意志に従わないような女性であってはならなかった。

ところが、次女のエリザベス・ピアスが示したこの小説への反応は、父親の期待とは正反対であった。ピアス家の末娘のメアリは、姉の態度を友人に宛てた手紙に記している。「エリザベスはかなりこの本に入れ込んでしまっています。わたしのまっさらな頭に助言やら忠告やらを詰め込もうとするのです。彼女も女性講演家になってしまおうのではないのかしら」^④。メア

りは自分の姉が「この本」に感化されて「女性講演家になってしまふ」危惧を誇張気味に語っているが、この言及において重要なのは、公的な場での女性の講演行為を批判する『女性講演家』を読むときに、この小説を「男女の領域分離」の教義と家庭性の規範を訓示するテクストとして受け止めなかった読者が存在したという事実である。

著者のセアラ・ヘイルは、一九世紀中葉に白人中流階級の女性たちの間で多大な人気を博した雑誌『ゴードイーズ・レディーズ・ブック』の編集者であった。『女性講演家』は南部出身のグリムケ姉妹による北部での講演活動を契機に執筆され⁵⁵、テクストは女性が公的な場で講演や演説をすることの禁忌を物語る。実際にヘイルは講演家として活躍したフランシス・ライトやエリザベス・オークス・スマイスを手厳しく批判しており、女性の講演活動に対して明確な不支持を示していた⁵⁶。そのような彼女のジェンダー思想は、とくに「男女の領域分離」を唱導する権威的な編集者として女性たちを公的な場から撤退させ、私的な「女性の領域」に滞留させたという保守派としてのヘイル像の定説を強化している⁵⁷。しかしながら、ヘイルは女性が適切な教育を受け、社会の諸活動に「市民」として参画するヴィジョンを終生もち続けた人物でもあった⁵⁸。また、近年ではヘイルは元来「ブルーストッキング」を自認していたとの論

考もあり⁵⁹、これまで考えられてきた保守的な領域論者としてのヘイル像とその領域のイデオロギー性は再考が迫られている。

ヘイルの領域思想の多くは『ゴードイーズ』誌に掲載されたテクストによって分析され、小説テクストは誌上で喧伝される思想を補遺する副次的媒体のように扱われてきた⁶⁰。だが、ニーナ・ペイムが指摘するように、ヘイルが「女性の領域」を語るとき、それは女性に課された規範を「政治化および公的問題化」するように意図された提題の言説であり、その企図は編集者という立場で書き下ろされる女性誌よりも、小説というテクストのなかで展開されていた⁶¹。ヘイルの小説は、自身の思想の本質を滴下するために用意された特別な場であったのだ。彼女が『女性講演家』を匿名で出版したのは、編集者セアラ・ヘイルとしてではなく、小説によって「女性の領域」を提起することの表明であったと考えられるだろう⁶²。このような点を視野に入れて、本稿は『女性講演家』が語る「女性の領域」の物語の深層にどのような政治的企図が埋め込まれているのかを検証する。ピアス父娘の事例が示すように、この作品はアンテベラム期のジェンダー規範に準拠した物語を装っていたために、家父長的な圧力や社会的批判を受けることなく、むしろ歓迎された。だが、一方でエリザベス・ピアスのような読者のみに伝えることのできる政治的声明を潜ませていた。セアラ・ヘイル

という女性作家が小説に提起した男女の領域論とは、じつは女性読者たち自身に「領域とは何か」を議論させるための教材そのものであったのだ。そして、その議論の過程には、結婚制度への懐疑をも示唆する「公的存在としての女性」という論点が含まれていたのである。

1 アメリカ初期演説文化と女性による講演行為

『女性講演家』は一八三〇年代のポストンを舞台にし、物語はのちに主人公の夫となるウィリアム・フォレスターが自邸の書齋で物書きを終えた場面から始まる。まるで「隠遁者」のように書齋に籠もるウィリアムを従兄弟のエドワードが訪れ、女性講師による講演会に連れ出そうとする。しかし、ウィリアムは「女性が説教師になるようなご時世ならば、男はいつだって隠遁者になろう」(17)と吐き捨てて、女性の講演行為に対する嫌悪感を隠さない。従兄弟の説得にしぶしぶ講演会へ出かけたウィリアムは、登壇した講演家マリアン・ゲイランドの「美貌と会話術」(18)に魅了されてしまい、彼女の講演会に足しげく通いつめ、やがて結婚を申し込む。だが、マリアンは講演家としての自信と自負心を棄てることができなかった。彼女はウィリアムへの愛情を断ち切ろうとポストンを離れ、南部のチャー

ルストンへ向かうのだが、この地で女性講演家に向けられた敵意と暴力に絶望し、病に伏してしまう。そして自分を追ってきたウィリアムの求婚に応じ、もう二度と登壇はしないと決意する。

ところが、マリアンは結婚後まもなく女性の講演にふたたび関心をもつようになる。彼女は一児をもうけ、しばらくは「妻として母として家庭的に、そして献身的に」(19)平穏な家庭生活を送るのであるが、ある狡猾な女性講演家の術策にのせられ登壇してしまう(20)。夫はマリアンから去っていき、彼女は衰弱の果てに死を迎える。最終の場面で、マリアンは今際のきわに見いだした「女性の権利」の本質について友人のソフィアにこう語るのだ。「わたしが主張してきたことはすべて間違っていました。女性の真の誇り、真の自立は、神が女性に授けた場で達成できるということ。夫の幸せこそが自分の幸せであることを。……」そのような行いによって、女性は自分の権利を得るのです(20)。

このように『女性講演家』は女性の権利運動に反対する立場から、自身の領域を逸脱して公的な場で講演活動を行い、夫に不服従であった主人公の悲運を語り、当時の女性読者に「真の女性らしさ」を教示する物語であるために「初期の反フェミニズム小説」とみなされてきた(21)。他方で、ヘイルがつねに女子

教育の充実や女性の地位向上を訴え続け、その実現に向けてさまざまな活動に尽力した事実から、この作品は作者の意図が両義的で、単純な反フェミニズム小説ではないとの解釈もある¹⁵⁾。たしかに彼女をこの時代特有のフェミニストであると見るならば、保守的なアメリカ社会において女性参政権の公表の機会として『女性講演家』を出版することは、「時期尚早」であつただろう¹⁶⁾。だが、テクストが批判していると思われる対象そのものを分析の起点にするとき、浮上する問題は変わる。じつはこのテクストは公的領域での女性の講演行為をそれ自体を批判してはいないのだ。この点に着目した読み方として、グランヴィル・ガンターは、テクストの批判対象となつているのは主人公マリ안의「自尊心」であると指摘する。「自尊心」は共同体への奉仕精神（リパブリカニズム）に対立する利己的な個人主義（リベラリズム）として、女性の講演行為から生じる領域の表象を通して描出されている。女性の取るべき行動が利己的にならぬかぎり、女性講演家という存在は是認されているとガンターは読み解くのである。また、キャロライン・レヴァンダーは、講演行為によって男性の領域に女性の身体が侵入する際の政治的意義を検証している。ヘイルのテクストは女性の講演行為を批判するどころか、女性の身体を通して政治化された男性性によって女性が政治領域から排除されるプロセスを暴いてい

るといふ¹⁶⁾。

以上のように、『女性講演家』をめぐる解釈はアンテベラム期の「男女の領域分離」に潜む矛盾を焙り出すが、ここで見逃してならないのは、女性による講演活動が問題視されてしまう歴史的背景である。アメリカ史における講演ないし公的な演説行為には共和国という政体を護持する重要な役割があり、とくに独立革命期の演説は主要な政治メディアであつた。古代ローマの弁論術を模範とした政治家たちの雄弁な「声」は、新しい共和国の言語として「洗練されつつも洗練されすぎず、紳士の言語であつて貴族のそれではない」ことが求められ、また、アメリカが「ひとつの独立した共和国政体」であることを人びとに認識させた。なおかつ、当時の演説ないし修辭的言説の目的は知的・道德的権威を公的コンセンサスとして形成し、それを市民的行為として位置づけることであつたため、個人の私的な信条は重視されなかつた¹⁷⁾。一九世紀初頭になると、白人エリート階級の「紳士たち」は建国の父祖たちから受け継いだ新古典主義的なレトリックによって演説文化を開花させ、「アメリカ演説の黄金期」を確立させたのだ¹⁸⁾。

ところが、共和国理念のもとに社会や共同体の形成を担ってきた紳士たちの演説は、その聴衆が「コモンマン」となるにつれ、しだいに修辭的表現や演説内容だけでなく話者自身も平俗

的になっていった。「下卑た民衆煽動からつましく崇高な類いのもの」にいたるまで、一九世紀半ばまでには洗練された雄弁術と庶民的な言葉が混在した多様な私たちの「声」が現れ、そのような事態をある外国人旅行者はアメリカの公的演説が低俗化したと捉え、慨嘆したようだ¹⁹。また、こうした演説の「民主化」を背景に、共同体が公的コンセンサスとして位置づけていた知的・道徳的権威は、一九世紀を通じて演説者である個人が私有するものとして移行していくことになる²⁰。

このようなアメリカの初期演説文化において、女性は男性とはまったく異なる状況に置かれていた。一般的には、独立革命後から一八二〇年代まで女性は公的な場で話すことを「禁じられて」おり、一八三〇年代に登場し始めた女性講演家たちは激しく非難されたと考えられてきたが、近年の女性史研究では、新しい共和国にとって女性が「雄弁に話し、社会的に活動する」ことは期待されていたと捉えられている²¹。キャロリン・イーストマンによれば、一八世紀末の北部社会では女子に対する演説教育が男子と同様に実施され、各地域で少女たちが発表や演説をする姿はよく見かけられたという。彼女たちのそのような行為は、将来的に女性が「市民」として公的に活動する可能性を大いに有していたのである。しかしその後、女性の社会的な役割についての見解が急激に偏狭なものとなり、女性の弁

論は「家庭の炉辺や家庭的な仲間内」に制限されるべきことが提言されるようになっていった。一八二〇年代までには、女性が公的領域で講演する行為はすっかり奨励されなくなってしまったのだ²²。このような公私の領域によって急速に男女が差異化された背景には、フェデラリスト党とジェファソン派のリパブリカン党に代表される政党政治による体制の強化や白人男性の選挙権の拡大など、男性たちに有利な政治的民主化によって女性の政治参加が否認されていくことが要因としてあげられる。政党争いによって不安定化する社会では、女性の非党派的な思考が公正な愛国者として美德となり、女性は間接的に政治的影響力を振るうことがよいとされたが、これは独立革命期の女性が政治に直接的な関与を試みたことへの「反動」——ローズマリー・ザガリのいう「革命の反動」——として、女性を政治領域から排除するための方便となった。やがて、白人の男女を取り巻くこのような政治的状況は「男女の領域分離」の言説に絡め取られ、一八三〇年代までには、聴衆に対して政治問題を公的に議論する女性は「真の女性らしさ」を失った男性的な人物とみなされるようになり、「悪意に満ちた攻撃」を受けることとなったのである²³。

そのような状況であっても、一八三〇年代以降のアメリカ社会は多数の女性講演家を輩出していった。しかも女性による講

演は政治領域への侵犯とみなされていたにもかかわらず、彼女たちは慎み深く道徳的であれば——つまり「真の女性らしさ」を喪失しないかぎり——概して好評であったと報告されている²⁴⁾。しかし、彼女たちに求められた慎みと道徳性とは、パトリシア・ビゼルが指摘するように、その女性的な資質の「言外の意味」として意図された「身体的な慎みと性的モラル」にはかならなかった。壇上の女性たちは講演内容の政治性や修辭文言から垣間見える知性よりも、身体と結びつけられた女らしさを尺度に講演家としての資性を評価されたのである。女性が聴衆に受容されるためには、知性をひけらかさず「女性らしい道徳的な物言い」を用いる貞淑な人物であることが認知される必要があった。いふなれば、女性講演家とは自分自身の性的貞操や道徳性を公的な場に進んで展示する者であった²⁵⁾。

2 誤読される女性講演家

主人公マリアン⁽¹⁾の夫となるウィリアム・フォレスターは、白人中流階級層に支配的な「男女の領域分離」と「共和国の母」の論理にもとづいて女性を判断する。彼にとって、女性は「男性の伴侶となり、子どもや若者を教え導き保護する」妻あるいは母親であり、「男性につねに庇護と扶養を求める」⁽²⁾存在

でなければならぬ。彼はそれ以外の女性の役割を想像することができないため、女性講演家は「神から定められた領域を踏みはずし、(……)ぼかんと口を開けた連中のまざるような眼差しに晒されている」⁽³⁾〔強調引用者〕人物であると述べる。まさしく彼の発言は、アンテベラム期の女性の演説行為がその話者の話ず知的かつ政治的な内容ではなく、身体性という基準によって評価されていることの証左なのである。彼女たちは「話す主体」ではなく「話す女性という奇妙な異形」であり、「見世物」ないしは聴衆に読まれるべく展示されたテクストであった²⁶⁾。『女性講演家』では、マリアン・ゲイランドという女性講演家はまさにそのようなテクストとして、ウィリアム・フォレスターというひとりの男性聴者によって読まれる存在となっている。

ウィリアムは女性講演家の存在価値を認めない。彼が想像するのは「女性の権利のことをまるで強奪されたかのようにわめき立て」⁽⁴⁾、「男のように粗野な女、荒々しい耳障りな声で公表する姿」⁽⁵⁾である。だが、従兄弟にマリアンの「珊瑚色の唇から発言される議論」⁽⁶⁾を聞きに行こうと誘い出され、「ウルストンクラフト流」⁽⁷⁾の女性像は覆されてしまう。彼は登壇するマリアンが「若く美しい女性」で、「物腰にはいくらか恥じらいがあったが、ゆったりと優美で」⁽⁸⁾あること

を認め、次のようにマリアンを観察している。

彼女は自分が社会の定則のひとつに違反していること、いわば、世界に長らく温存されてきた偏見に挑んでいることに気づいていた。「……」彼女の言葉づかいは品がよく澄んでおり、声は朗々と響き渡り、しかも耳に心地よい音色であった。

ウィリアム・フォレスターは賞讃と哀れみの入り交じった感情で女性講師をじっと見ていた。彼女の美貌と高い教養を褒め讃えずにはいられなかった。彼女の意見とそれを公表するさまについては咎め立てをしたかったが。そして彼は彼女のことを哀れんだのである。彼女は貧しさゆえに、あんなことまでして生活の糧を求めなくてはならないのか(11-12)。

ウィリアムは、マリアンには父親がなく病身の母親を扶養しなければならぬことを事前に知らされていた。彼女を哀れむ理由について、従兄弟にこう漏らしている。「彼女は本当にかわいそうな人だ。つらい試験にちがいない——あんなに若くて慎重があつて——彼女ほど真に女性らしい人が——あんなふうに人前に晒されるとは、つらい試験にちがいない」(30)。ほどなく、マリアンの「珊瑚色の唇」とそこから発せられる「声」、そして美しい身体から表現される「慎み」が誘因となり、「彼

の蔵書と趣味よく整えられた書齋は放置された」(32)。つまり、ウィリアムは書齋という私的空間を抜け出し、結婚という公的な制度によってマリアンを家庭に取り囲み、自身の父権を確立していくのである。たとえば、マリアンからある講演会への出席の許可を求められると、「ぼくはむしろ君が(……)わが家の暖炉を囲んで話してくれるのを聞きたいんだ」(32)と妻の活動範囲を家庭内に制限し、妻がそれを破るときわめて冷淡な態度を示した。以降、マリアンがある慈善団体や女性の講演に関心を寄せるたびに、その父権は妻の境遇を脅かすのだった²⁶⁾。先述したキャロライン・レヴァンダーが論証するように、『女性講演家』というテクストは一九世紀中葉の公的演説という政治文化において、女性の身体性に結びつけられた「声」が規制されるべき対象として周縁化され、父権的な男性アイデンティティの形成と強化が正当化される過程を暴くのである²⁸⁾。たしかにレヴァンダーの分析は、読まれる「見世物」とそれを読む聴衆という関係性を通して女性講演家の身体性に執着し、その「声」を専有することによって成立する男性性の戦略を露呈させるが、セアラ・ヘイルにとって問題はそれだけにとどまらない。おそらく「声」を奪い取られる以上にヘイルが問題視しているのは、女性講演家という見世物とその身体性のためにつねに誤読され、反故にされてしまうもの、すなわち、女性の

知性や政治的姿勢である。マリアン(1)の講演行為を哀れむウィリアムの第一印象は誤読である。第一に、マリアンは母親の扶養と生活の糧のためだけに講演家になったのではない。幼少時代に、寡婦であった母親の労働状況が男性のそれと比して「不正の極致」(2)に見えたことが発端となっている。彼女は教養と知性の涵養に励み、「裁縫以上の何か」(3)ができる女性の能力を社会に示すため、啓蒙主義的な男女の平等と女子教育の必要性を高唱しようと決意したのである(4)。第二に、ウィリアムはマリアンを慎みある「真の女性らしさ」の具現者としてみなしているが、じつは彼女は「美しく、才能があり、教養があり」(5)。そして評判がよい(6)。ことを自負してやまない人物である。彼はマリアン(7)の真意と自負心を見抜けず、講演会に通い続け、その誤読をますます膨張させていく。

来る日も来る日も、彼はミス・ゲイランドの美貌と会話術に魅せられて、彼女の世界で過ごした。彼は彼女が声を与えている美しい思想と感情を——それらを彼自身の筆記録だと思いつきながら、熱心に耳を傾けた。毎夜、彼は講演室に出入りし、その意見を注意深く聞いた。数か月前であれば耳を塞いでいたにちがいない、女が感化院送りの狂人のような演題をわめきちらしていると公言していたかもしれない。彼は耳

を傾けていた。あのひとは病身の母親を扶養して生活する必要性があるから、女性らしい繊細さや感情を犠牲にしているのだ。そんなふう(35-33)に想像すると涙がこぼれ落ちてしまいそうだった。

ウィリアムの誤読のゆえに、知的かつ政治的であるはずのマリアンの訴えは、ウィリアムの耳には「数か月前であれば耳を塞いでいた」意見として一切かき消されてしまっている。彼はマリアンの「美貌と会話術」——美しい身体と「声」——に魅了され、彼女が病身の母親のために「女性らしい繊細さや感情」を犠牲にしていると思いつき、涙がこぼれ落ちて「しまうほど熱心に傾注する。ウィリアムは、マリアンの真実の動機を誤解したまま、彼女の知性と政治性を「美しい思想と感情」として「彼自身の筆記録」に書き換えていくのである。もちろん、これはウィリアムに限ったことでなく、ほかの聴衆もまた「女性講演家の申し分のない美貌を賞讃の眼差しでじっと見つめ、女性たちを代弁する彼女の雄弁な訴えに聴き入っていた」(43)のであり、彼らは彼女の容姿と声のみに注目する。通常、講演者は一時的であって話者として発言しているかぎり、主題に関する知的権威を掌握できるものと考えられているが、当時のアメリカ社会では、女性の身体と「男性的な知性」を兼備

する女性講演家は受け入れられなかった（というより、存在しないことになっていた）ため²⁸、女性であるマリアンには自分の知性と発話の権威を担保できないことが示唆されている。ヘイルは女性講演家の身体こそが女性の修辞言論や政治表明への注視を消散させる原因であり、知的権威を獲得する際の障壁だったことを認識していたのだろう。だがヘイルはその障壁を等閑視することなく、廉直にも教育によって克服しようとした。彼女が取り組んだのは、「読むこと」の実践であった。

ヘイルは自身の雑誌にしばしば「女性が読むこと」の有用性を論じている。それによれば、昨今の「不完全な女子教育制度」により少女たちは「学びへの愛着ではなく自己顕示という自尊心を吹き込まれ」、教育課程が修了すると「本を投げ出し、〔……〕目もくらむような流行り物の世界へ」遁走してしまっている。そこで、ヘイルはそのような教育上の「欠陥を補う」ために「体系的に読むこと」を助言し、とくに「知力の組み立て」(mental composition)と「読む実践を推奨した」²⁹。

どんな作品でも読むことは判断力の向上へ導いてくれます。何度も立ち止まって推論し、言外にある特定の趣旨や意図を探るのです。読み終えたら、全体の視野やその道徳的な基調、感情の方正さ、文体の特徴をよく考えてみましょう。こうし

て知の心 (mind) が知識の貯蔵庫に加わっていくと情の心 (heart) はよい影響を受けて、さまざまな機能や情緒が力強い行動を呼び起こし、判断力を成熟させ、情の心の進むべき方向を正しく導いてくれるのです³⁰。(強調引用者)

さらにヘイルの指導は「文章の組み立て」(written composition)へと進み、とりわけ「ありふれた本」を選ぶことや、読後には「あらゆる主題や論点について、自分の見解や意見、感情を書き留める」ことを指南する³¹。つまり「体系的に読むこと」とは、読者が書かれた内容の意味を構築し、論点に対する自分の意見を記録するまでの一連の作業を指す。ヘイルのねらいは、その作業を通じて読者が判断力を養いながら、自らの意見を組み立てるといふ個人的な討論の実践にあった。ニコル・トンコヴィチが指摘しているように、女性が「読むことのプロセス」に参入することは、ある特定の問題に対して女性が思考や意見の自己表明を私的に試行できることであり、いわば、女性が私的領域に身を置きながら、書かれたテキストを媒体として政治的な発言力を構築するという公的活動の可能性を意味したのである³²。では、ヘイルが読むことの実践的テキストとして『女性講演家』を提案したとすれば、この作品はその私的な行為を介して、アンテベラム期の女性読者にどのような討論の

場を提供したのであるうか。

3 実践的テキストとしての『女性講演家』

興味深いことに『女性講演家』の副題が「女性の領域」であり、それが私的な家庭空間を明示しているにもかかわらず、このテキストには模範とされるべき家庭生活の具体的描写は一切出現しない。マリ안의友人ソフィア・グリーンはこの物語の「真の女性らしさ」を体现する女性であるが、彼女によって営まれる（家庭性の規範にもとづき、幸福であるはずの）家庭でさえ描かれていないのである。しかも、ソフィアは結婚前には「臆病で引込み思案の少女」(80)としてマリアンと同じ女子セミナリーで過ごし、また、結婚後は家庭的に献身する女性となつてマリ안의夫への不従を諫める役割を務めるが、多くの聴衆を惹きつける講演家のマリアンに比べると、ソフィアが「退屈な」人物であることは否めない。したがって、模範的な家庭生活やそれを切り盛りする理想的な家庭婦人を手本として女性読者に提示することが、この作品におけるヘイルの主たる意図ではない。むしろヘイルが強調しているのは、登場人物たちによって議論される領域論である。ウィリアムがマリアンに求婚する際、ふたりが「女性の領域」に関する意見をぶつけ合

う場面があるが、それはまさに女性読者が私的に討論する実践の場として提供されている。

「女性が人前で発言をすることに——偏見と呼びたければそうしていただきたい——非常に根深い嫌悪を感じます。自分の領域にいればとても敬愛される女性が、自分に不相応の領域を求めて家庭から離れてしまうなんて、僕には耐えられない。僕にはまったく出過ぎた、(uncalled for) ことのように思えるのです」。(強調引用者)

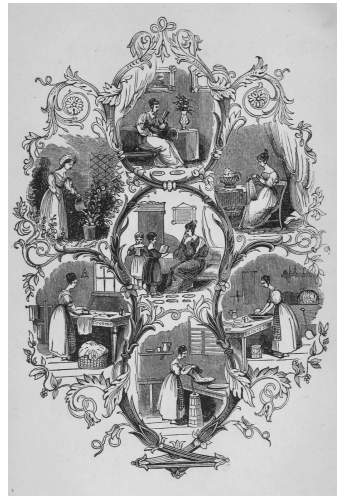
「まあ、出過ぎているとおっしゃるのですか。殿方にとってはいいつもそれが重荷なのです。出過ぎている、と。家庭という後宮に囚われた厚化粧のお人形、家事にあくせく勤しむ卑しい女、女性がそれ以上のことを望もうとすると、そう言われてしまうのです。しかるべき女性の領域！ そんなものどこにあるのでしょうか。キッチン、それとも洗濯場かしら。あるいは(……)揺りかごのそばに座って、夫の意のままにおとなしく頭を垂れることかしら。そうだとすれば、なんて横暴で不合理なことでしょう。それとも、もっと高邁にも、活気のない生活や軽薄な娯楽を求めて日々暮らすことが、女性の領域なのでしょうか。わたしはそうは思いません。そんなふうには女性は生きるべきだと、神が意図されたとは思えな

いのです。あなたにはおわかりにならないでしょう。殿方にはわかるはずがないのです」。(88-89)〔強調原文〕

続けてウィリアムは「殿方」に反発するマリアンに、「女性の領域は男性のそれとは違うのです。〔……〕女性の社会的な権利、慣習的な権利は等しく尊ばれるものであっても、それは同じではないのです」と断言し、「仕事の喧嘩や騒ぎで疲弊した」男性にとって家庭の「幸か不幸か」は妻によって決定されることや、また、女性には母親として「幼子の心を鍛錬し導くという純粹で神聖な仕事」があることを説き、それらが女性の「高尚で榮譽ある特権」であると主張する(89-90)。ウィリアムの主張に対し、マリアンも応酬する。「もっとも高尚で、もっとも榮譽あるとおっしゃるのですか！ 殿方の女中、つまり召使いになることが、主人の帰宅に備えて家をきちんと整えておくことが。〔……〕子どもを養育して世話をし、パパがおうちに帰ってきたらお行儀よくするのですよと教えることが。榮譽ある特権、まったくですわね！」(90)。つまり、マリアンは夫と妻を「主人」と「召使い」の関係に捉えたいうえで、「女性の領域」がキッチンや洗濯場といった現実の家庭空間として家事労働および育児を行う具体的な場であると述べる。それに対し、ウィリアムは家事や育児を女性に与えられた「特権」と

して神聖視し、「女性の領域」を家庭外で疲弊した男性に幸福をもたらす場とみなす。このようにテキストはふたりの対照的な見解をわかりやすく提示し、女性読者にジェンダー化された領域の概念を検討する機会を与えている。これがヘイルの提唱する「読むこと」の過程において、男女の領域論について「自分の見解や意見、感情を書き留める」訓練であった。

さらに、ふたりの「女性の領域」をめぐる議論において着目すべきは、「出過ぎた」(uncalled for)という表現である。アメリカ中流階級社会では『女性講演家』が出版された一八三〇年代以降、英国とは異なるアメリカ人女性のための家事指南書が広く流通しはじめ、雑然とした家庭を秩序のある清潔な空間とするために多くの主婦たちはこれらの助言を参考にした¹⁵⁾。たとえば、キャロライン・ハワード・ギルマンが編集した『女性のための一年の記録と主婦の備忘録ノート』には、「女性の領域」を表す画像が口絵に描かれているが、図示されているように、読者たちは領域を「球形」のイメージによって把握していた¹⁶⁾。七分割された「女性の領域」は統制のとれた球形として視覚化され、それぞれの枠内に主婦が裁縫、調理、掃除、洗濯、庭の手入れといった家事労働をつとめて優雅にかつ無表情にこなしている。ドロレス・ハイデンが指摘するように、子どもたちに本を読み聞かせている中央の画像を除くと主婦はつね



ゲルマン『女性のための一年の記録と主婦の備忘録ノート』(1838) 口絵

に孤独である。また、主婦たちに課した「苛酷」で「不快な家事労働」——「井戸から水を汲み上げてそれを家へ運び、燃料用の薪を割り、鉄製の調理用コンロの熱で汗だくになり、重い水塊と格闘し、水を入れた冷蔵庫の排水をし、汚水を汲み出す」⁽²⁷⁾といった家事の現実——はけっして描出されていない。たしかに、ここには整然とした秩序や世間的な体裁があり、まさにこの図像はウィリアムの理想とする家庭空間を示している。だとすると、「出過ぎた」(uncalled for) 状態にいる女性講演家のマリアンとは、美しく秩序ある領域／球形には「不必要な」(uncalled for) 存在にほかならず、ウィリアムのような「真の女性らしさ」の礼讃者にとってその秩序を脅かす人物だといえる。はたして、当時の女性読者はこの「女性の領域」を

どのように眺めたのだろうか。多くの女性は、このような上品かつ無表情な主婦像を理想的なモデルとして無批判に受け入れたかもしれない。だが、この図像にソフィア・グリーンのような「退屈な」主婦像を見いだす読者がいたとすれば、その主婦像とは対照的な「出過ぎた／不必要な」女性であるマリアンに対して、同調的な反応を示した女性も——冒頭で紹介したエリザベス・ピアスのように——存在したのであろう。

マリアンは結婚後も夫に服従せず、「自分自身で思考・行動する権利を侵害することや、大切な意見を犠牲にすることができなかった」⁽²⁸⁾ ために、悲劇的な死が与えられている。しかし、ヘイルにとって自らの職業を自らの意志で遂行しようとする自立心の旺盛なマリアンこそが、読者に期待した女性像だったのである。講演家という職業について独身時代のマリアンがウィリアムに語っている場面へ立ち返ってみると、ヘイルが支持していたのは、女性たちがマリアンのように知性を育み、職業を得て社会で行動することであった。

聴衆を目の前にしたとき、わたしはたんに他人や本から学んだ意見を模倣しているわけではありません。わたしが語る言葉のひとつひとつは、わたしの本心、(heart) から、女性、地位を向上したいという願いから命じられているのです⁽²⁹⁾。

〔強調引用者〕

まさにマリアンは、「読むこと」によって知性と政治的発言力を獲得し、「情の心 (Heart) の進むべき」正しい方向へ導かれて講演家になったのである。ヘイルの小説は表層的には領域を逸脱する女性講演家への批判を装ってはいるものの、その深層は職業を得て自立を目指すマリアン・ゲイランドという女性像を読者たちに提示することであった。しかも、ヘイルは女性の自立という問題について、父や夫のない父権不在の状況にこそ、マリアンが講演家として自立を達成しうる可能性を示唆しており、翻って結婚という制度のために活動領域と自らの政治的意見が制限され、その自立が阻まれることを暴き出してもいる。

こうした描写は物語の背後にある「夫の保護下にある妻の地位」(coverture) という現実を女性読者に向き合わせ、女性が結婚をしないという生き方についても私的に議論させたのかもしれない。

さて、マリアンが美しい「女性の領域」を乱す「出過ぎた」存在であるならば、彼女の死後に女性講演家という「不必要な」要素が払拭されたその領域は、ウィリアムの期待通り「白人、中流階級、(……) 既婚女性あるいは結婚を希望する女性たち」という世間的体裁のよい「普遍的な女性」⁽³⁸⁾で埋め尽くさ

れることになる。だが、はたしてそのような空虚ともいえる普遍的なアメリカ人女性像が、小説家セアラ・ヘイルの待望するアメリカ共和国の女性市民の姿なのかと問われるのなら、否定しなければなるまい。自らの職業を「女性編集者」(editress) と称したヘイルが、たとえば「女性作家」(authoress) や「女医」(doctress) 等の女性化した職業名を好んで使用したことはよく知られているが⁽³⁹⁾、それによって彼女は職業における女性のプレゼンスを顕在化させ、女性もまた公的生活の重要な存在であることを認識していたのである。「情の心」である「本心」がマリアンを女性講演家 (lectress) として「正しく」導き、そこから「女性の地位を向上したい」との願いを湧出させたのであれば、その願いはまさにセアラ・ヘイル自身の願いであったのだ。小説の第三章に掲げられたエピソードは、じつは作家自身の言葉である。「わたし自身の性である女性とわたし自身の国家の信望を向上させたい」という願いは、わたしの思い起こすかぎり、もっとも幼い頃からの知的な感情のひとつでした。S・J・ヘイル夫人」(23)。

このようにして、ヘイルはその身体性のために消し去られた女性講演家の知性や政治的声明を問題化するにあたり、読者個人の知力を私的かつ実践的に鍛錬させる素材として提起した。しかも、女性の講演活動を否定する表面上の身ぶりのために社

会的批判を受けることなく、領域に関する議論を巧妙にテクストのなかに再現してみせた。おそらく、ヘイルは「自分自身で思考・行動する」多数の「マリアン・ゲイランド」という公的存在としての女性が萌芽する可能性を信じたのである。

おわりに

はたして、『女性講演家』を読んで深く感化されたピアス家の次女エリザベスは、マリアン・ゲイランドのような講演家となったのか。それは否である。彼女は決して急進的な女性の権利運動家として活躍することはなく、また、女子教育を推進する運動にも直接的に加わることはなかった。だがエリザベスは、女性という存在が「社会に少なからぬ影響力を行使でき

る」ゆえに「女子教育の重要性をますます確信し」、日曜学校で子どもたちに聖書を教え、本を配布するなどの慈善活動に参加し、ライシーアムにも出席した。さらに、奴隷制や南北戦争といった政治問題について「熱意を込めて自分の考えを述べた」〔強調引用者〕という。自身の政治的見解を公表する行為は日記や家族に宛てられた書簡のなかで完結してしまっただけ、彼女は——ヘイルが女性読者たちに「読むことのプロセス」に参入してほしいと期待したように——まさしく自己の思考や意見を私的に表明したのである。そして、おそらく女性が結婚をしない生き方についても、私的に議論したかもしれない。エリザベス・ピアスは八七歳で亡くなるまで生涯独身を貫いたのだ^④。

註

- (1) Sarah Josepha Hale, *The Lecturers: or, Woman's Sphere* (Boston: Whipple and Damrell, 1839). 本稿ではこのテクニストからの引用を本文の括弧内に頁番号で記す。
- (2) ジョン・ピアスの朗読行為についてはR・スボレイとM・スボ

レイが「女性に『よむ』「男女の聴衆」への講演行為についてはスーザン・サユスタを参照された」。Ronald J. Zboray and Mary Saracino Zboray, "Books, Reading, and the World of Goods in Antebellum New England," *American Quarterly*, 48:4

- (1996): 604-605; Susan Zaeske, "The 'Promiscuous Audience' Controversy and the Emergence of the Early Woman's Rights Movement," *Quarterly Journal of Speech*, 81 (1995): 191-207.
- (3) James R. McGovern, *Yankee Family* (New Orleans: Polyanthos, 1975), 14. シュニクス文壇の人物像について、本稿はシニクス・ヤンキファミリーの研究に依拠している。
- (4) Quoted from Ronald J. Zboray and Mary Saracino Zboray, "Have You Read...?: Real Readers and Their Responses in Antebellum Boston and Its Region," *Nineteenth-Century Literature*, 52.2 (1997): 165-166.
- (5) Barbara Barthes and Suzanne Gossett, *Declarations of Independence: Women and Political Power in Nineteenth Century American Fiction* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1990), 49; Zboray and Zboray, "Books," 604-605.
- (6) ハイルは自身の雑誌のなかで、フランシス・ライットのホストン講演について「多くの立派な人びとは(……)『ミス・ライットとどう見世物が香具師のそれと同じだとみなしてゐます』と述べてゐる。また、ハイルの友人であったエリザベス・オークス・スミスは講演活動をもつて、ハイルはメリスに「辛辣な非難の手紙を書かされた。」Sarah Josepha Hale, "Robert Owen's Book," *Ladies' Magazine*, 29 (September 1829): 413; Mary Alice Wyman, *Selections from the Autobiography of Elizabeth Oaks Smith* (New York: Columbia University Press, 1924): 97.
- (7) 従来の保守的な領域論者としてのハイル像については以下を参照しよう。Ann Douglas, *The Feminization of American Culture*, the Noonday Edition (New York: the Noonday Press, 1998 [1977]), 47-48, 56-57; Susan Plimney Conrad, *Perish the Thought: Intellectual Women in Romantic America, 1830-1860* (New York: Oxford University Press, 1976), 38-44.
- (8) Mary Kelley, *Learning to Stand and Speak: Women, Education, and Public Life in America's Republic* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2006), 210-217.
- (9) Jane E. Delaurier, "The Radical Frances Wright and Antebellum Evangelical Reviewers: Self-Silencing in the Works of Sarah Josepha Hale, Lydia Maria Child, and Eliza Cabot Follen." Ph. D. Dissertation, University of Missouri-Kansas City (2015): 172. シニクス・ゴロリーヒビスター・ハイル像と『女性講演家』の分析は斬新で興味深い。ゴロリーヒビスターはハイルが「個人的な思想家から転向して保守化せざるを得なかった『個人的事情』に着目し、それにもつづいて作品を解釈している。」しかし、本稿はハイルの意図した領域の政治性が広範に読者に働きかけ、アンテムラム期アメリカ社会のシニクス・思潮の形成に大きく関わったものとして作品を読む。
- (10) たとえば、以下を参照のこと。Laura McCall, "The Reign of Brute Force Is Now Over: A Content Analysis of *Godley's Lady's Book, 1830-1860*," *Journal of the Early Republic*, 9.2 (Summer 1989): 217-236; Patricia Okker, *Our Sister Editors: Sarah J. Hale and the Tradition of Nineteenth-Century American Women Editors* (Athen: The University of Georgia Press, 1995).
- (11) Nina Baym, "Sarah Hale, Political Writer," *Feminism and American Literary History* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1992), 170.

- (12) アン・ダグラス・キーマン・コンラッドの『モーデーヌ』誌の分析で明らかにされているように、ノールによる領域論の喧伝とそのイデオロギー性の強化は、彼女の「編集者としての立場での仕事」に結びつけられている。その一方で、ノール本人は小説の教化力や「真実」を伝える力を信頼していた。小説『ノースマン』の序文や『モーデーヌ』誌掲載のロケットを参照せよ。Sarah Josepha Hale, *Northwood: or, Life North and South, Showing the Character of Both*. Rpt. (New York: Johnson Reprint, 1970 [1852]), iv; Hale, "Editor's Table," *Godey's Lady's Book*, 44 (February 1852): 163.
- (13) たしかに、ダンプ・ノールは主人公が身体的虚弱のために女性の権利を要求できず、「家庭性とマレニズムの摩擦」を「病人の姿」として提示した反マレニズム小説と捉えられている。Diane Price Herndl, *Invidious Women: Figuring Feminine Illness in American Fiction and Culture, 1840-1940* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1993), 64.
- (14) ベーヌとロゼットは「女性の領域」の義務と公的活動の葛藤が解消されぬまま、主人公に対する作者の曖昧な態度が示される小説である。Bardes and Gossett, 46-47.
- (15) David S. Reynolds, *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville, with a New Foreword by Sean Wilentz* (New York: Oxford University Press, 2011), 391.
- (16) Granville Gantner, "The Unexceptional Eloquence of Sarah Josepha Hale's Lectures," *Proceedings of the American Antiquarian Society*, 112 (2004): 269-89; Caroline Field Levander, *Voices of the Nation: Women and Public Speech in Nineteenth-Century Literature and Culture* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998), 14-15.
- (17) Sandra M. Gustafson, *Eloquence Is Power: Oratory and Performance in Early America* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2000), xviii-xxv; Kenneth Cmiel, *Democratic Eloquence: The Fight over Popular Speech in Nineteenth-Century America* (Berkeley: University of California Press, 1990), 39-49; Gregory Clark and S. Michael Halloran, *Oratorical Culture in Nineteenth-Century America: Transformations in the Theory and Practice of Rhetoric* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1993), 1-9.
- (18) Gustafson, viii-xiv.
- (19) Cmiel, 12-13; Levander 3.
- (20) Cmiel, 13-14; Clark and Halloran, 8-9, 17-24.
- (21) Carolyn Eastman, *A Nation of Speechifiers: Making an American Public after Revolution* (Chicago: The University of Chicago Press, 2009), 53-55; Gantner, 260-261.
- (22) Eastman 72, 77-78; Teresa Anne Murphy, *Citizenship and the Origins of Women's History in the United States* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2013), 65.
- (23) トナハンク・ベニーの例にちなみ、彼女が東部の各紙から「女性雑誌」を「男性的」「女器物」などの批評を教わった。Eastman 179; Rosemarie Zagari, *Revolutionary Backlash: Women and Politics in the Early American Republic* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2007), 135-136.
- (24) Gantner 275; Levander 151.
- (25) Patricia Bizzell, "Chastity Warrants for Women Public Speak-

- ers in Nineteenth-Century American Fiction," *Rhetoric Society Quarterly*, 40.4 (2010): 386-387; Judith Mattson Bean, "Gaining a Public Voice: A Historical Perspective on American Women's Public Speaking," Judith Baxter (ed.), *Speaking Out: The Female Voice in Public Contexts* (London: Palgrave Macmillan, 2006), 25; Zaleske: 192, 198.
- (26) Bean 25.
- (27) 具体的には、マリオンが「南部における黒人教育の普及のための協会」の会長就任を依頼された際、夫は「軽蔑」の意を表し(94)、『またたび妻が登壇したとき』には彼女を捨て去ったことな²を指す(105)。
- (28) Levander, 23-34.
- (29) Bean, 22, 26.
- (30) Sarah Josepha Hale, *The Lady's Book*, 16 (March 1838): 143; *The Lady's Book*, 16 (April 1838): 191.
- (31) *Ibid.*, 191.
- (32) *Ibid.*, 191.
- (33) Nicole Tonkovich, "Rhetorical Power in the Victorian Parlor: *Cady's Lady's Book* and the Gendering of Nineteenth-Century Rhetoric," Gregory Clark and S. Michael Halloran (eds.), *Oratorical Culture in Nineteenth-Century America*, 162, 169-170.
- (34) Joel Pfister, *The Production of Personal Life: Class, Gender, and the Psychological in Hawthorne's Fiction* (Stanford: Stanford University Press, 1991), 76.
- (35) Sarah A. Leavitt, *From Catherine Beecher to Martha Stewart: A Cultural History of Domestic Advice* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2002), 5-6.
- (36) Caroline Howard Gilman, *The Lady's Annual Register, and Housewife's Memorandum-Book, For 1838* (Boston: T. H. Carter, 1838), frontispiece.
- (37) Dolores Hayden, *The Grand Domestic Revolution: A History of Feminist Designs for American Homes, Neighborhood, and Cities* (Cambridge: The MIT Press, 1981), 13, 16.
- (38) ハトリシア・オッカーによると、『ワ』の「普遍的な女性」像とは、³イルが編集者として女性読者たちに求めた象徴的な女性像であった。『イル』は「女性は個人として充実すべき」と考えながらも、編集者としては本質主義的な性規範とそれにもとづく道徳的価値観を共有できる女性たちが『モーニング』誌の読者であると想定していた。『イル』は小説家としての仕事にまつてい⁴な「女性の差異や個性」を重視したと思われ。Okker, 66, 78-79.
- (39) Okker, 74-75; Tonkovich, 171-173.
- (40) McGovern, 40-41, 161.

(まずだ くみこ／立正大学)